



ひびき

～ ともだちいっぱい かがやく子 ～

Letter of the M.Y. elementary

南山田小学校だより

学校通信 NO.314
令和4年度6月号
令和4年5月31日

自然との関わり方

副校長 山谷 浩司

新緑が、ひととき鮮明に映える季節となりました。2ヶ月ほど前までは、屋上から容易に緑道を見渡すことができましたが、現在は、色濃く茂った木々の枝葉に視界が遮られ、行き交う人の姿も見えづらくなっています。緑道の豊かな樹木は、今年も初夏の強い日差しから、私たちを守ってくれています。

私は学生時代の4年間を北海道で過ごしました。残念なことに、キャンパスライフを謳歌することができず、時間を見つけては道内の名峰に登って、気持ちをリフレッシュすることが常でした。中でも、大雪山系旭岳を起点に北海岳、白雲岳、忠別岳、トムラウシ山、十勝岳、富良野岳を5日間の行程で縦走した大学2年の時の経験が大きな財産となっています。時期は7月でしたが、森林限界から山頂にかけて、所々雪渓が見られました。旭岳山頂からはお米が入っていた頑丈なビニール袋に腰を下ろし、雪渓に覆われた斜面をそり滑りの要領で滑り降りました。登山道に戻ると周辺にはエゾ鹿やヒグマの糞が点在し、大木にはヒグマの爪痕が多数残されていました。ここが野生動物の生活圏であることを再認識し、緊張感を持続しながら歩を進めました。

源流域の枝沢を横切る際、水中を瞬間移動する魚影に目が留まりました。道内出身の友人に訊ねたところ、オシヨロコマというイワナの仲間であることが分かりました。夕方、釣りの得意な先輩が夕食用にとオシヨロコマを10尾程釣ってきました。私は食べることも、魚体の美しさに見惚れました。このオシヨロコマとの出遭いが、後年、溪流釣り、更にはフライフィッシング(毛針釣り)へ心酔していくきっかけとなりました。

縦走3日目の午後。山の天候が急変しました。雲一つ無かった青空が、わずか30分ぐらいの間に厚い雲に覆われ、周囲が薄暗くなりました。次の山小屋までは1時間以上かかることを鑑み、急遽、ピバークすることになりました。強風を避けることのできる窪地にテントを2張り設営し、6人のパーティーが2つに分かれてテントへ避難しました。その直後、バケツの水をひっくり返したような雷雨に見舞われました。気温は18℃から3℃まで急速に低下しました。低体温症を避けるために、リュックの奥からダウンジャケットを取り出し、トレーナーの上に着込みました。雷鳴が轟く中、雷は上空から落ちてくるという固定概念は脆くも崩れ、横に向かって光る稲妻を何度も目にしました。結局、雷雨は日没まで降り続けました。ピバークの最終判断をしたのは、登山経験が最も豊富なリーダーでした。リーダーの適切な判断のお陰で、遭難という危機を回避することができました。

翌日は前日の悪天候が嘘のように朝から快晴で、半日遅れの行程はすぐにリカバリーすることができました。双眼鏡を通して草を食むヒグマの親子を観察したり、キタキツネがネズミを捕えるシーンを目撃したり、愛らしい高山植物を写真に収めたりするなど、北海道の豊かな自然を満喫しました。最終日は、富良野岳山頂から雄大な十勝連峰を望み、大自然の懐の深さと、怖さを体感した5日間の縦走を終えました。

先般、景勝地を巡る観光船が知床半島の沖合で消息を絶ち、沈没するという痛ましい事故が起きました。事故が起こった海域は、例年、3月下旬まで接岸している流氷の影響で海水温が低く、また、事故当日は、強風注意報と波浪注意報が発令されていました。このような悪条件の中で、なぜ船は出航したのか…？

自然の雄大さ、荘厳さを直接体感することは大変意義深いことです。しかし、自然はいつも優しい一面だけを見せてくれるわけではありません。それだけに自然に対して畏怖の念を抱いてリスペクトするとともに、最悪の事態を想定したリスクマネジメントを講じる姿こそ、自然と対峙する上で欠かすことのできない資質・能力ではないでしょうか。

6月は6年生の修学旅行と5年生の宿泊体験学習が予定されています。事前の準備を入念に行なって、仲間と協力しながら有意義な時間を過ごしてほしいと思います。保護者の皆様には、お子さんの健康管理にご留意いただき、安心して1泊2日を過ごすことができますよう、ご支援、ご協力の程、よろしく申し上げます。